

## 脱炭素社会の実現に向けた地方自治体の取組 (岩手県及び久慈地域の事例)

重 浩一郎<sup>1</sup>

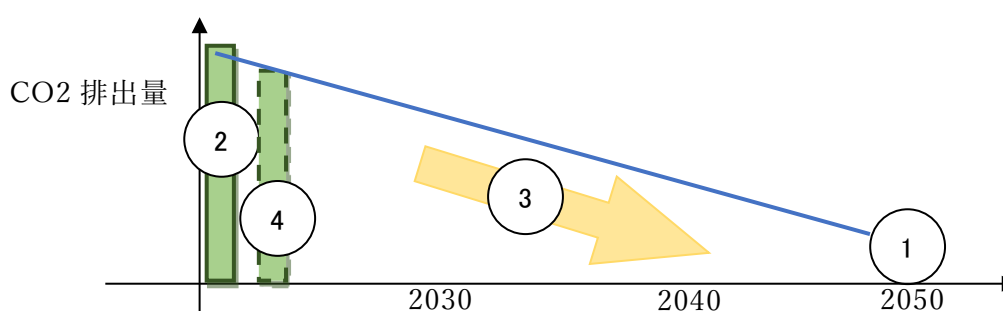
### Efforts of Local Governments toward the Realization of Decarbonized Society (A Case Study in Kuji Area and Iwate Prefecture)

Koichiro Shige

#### 1 はじめに

岩手県や東京都など一部の自治体からスタートした「2050年脱炭素表明」が、全国40都道府県を含む514自治体に広がっている(令和3年12月28日現在)。岩手県内では県知事が東北で初めて表明し、全33市町村のうち14市町村が続いて表明した。しかし、2050年脱炭素を念頭においた地球温暖化対策法に基づく超長期計画を策定しているのは現時点では久慈市のみである。全国的にも2050年脱炭素を見据えた超長期計画を策定している自治体はまだ少数であり、計画的に施策を推進するために、市町村の現状を踏まえた政策提言が求められている。

そこで、本研究では、再生可能エネルギー導入ポテンシャルが高い地域として岩手県に着目し、市町村首長のゼロカーボンシティ表明から具体的な対策実施までのプロセス及び県内市町村の状況を図1の通り整理しアンケート調査を実施した。さらに、先進的なステージにいる久慈市を含む岩手県北の9市町村に着目し、ワークショップ実施など、現状やさらに取組を推進するための課題等について取りまとめているところであり、ここでは、令和3年度の活動を報告する。



ステージ		市町村
①	目標設定(2050年 ゼロカーボン表明前)	盛岡市、大船渡市、花巻市、北上市、遠野市、陸前高田市、 奥州市、滝沢市、雫石町、岩手町、矢巾町、西和賀町、金 ケ崎町、平泉町、住田町、大槌町、山田町、岩泉町、田野 畑村 19市町村

<sup>1</sup> 昭和女子大学現代ビジネス研究所 研究員

②	現状把握(2050年ゼロカーボン表明後)	宮古市、釜石市、一関市、二戸市、八幡平市、紫波町、葛巻町、普代村、軽米町、野田村、九戸村、洋野町、一戸町 13市町村
③	計画策定	久慈市(岩手県) 1市
④	対策実施	-

図1 本研究の4つのステージからなる脱炭素ロードマップと岩手県内市町村の状況

## 2 研究方法

### 2.1 岩手県内市町村アンケート調査

岩手県内全市町村に対して、国が実施している「地方公共団体における地球温暖化対策に関する法律施行状況調査」で令和2年度分として回答した結果等について提供依頼した。

### 2.2 久慈地域でのワークショップ(市民向け・行政職員向け)

市民等を対象にして脱炭素について学び、地域づくりとの関係を参加者とともに考える「脱炭素まちづくりアイデア・カフェ」と、行政職員向けに各職員が普段抱えている地域課題と脱炭素の同時解決を目指す「脱炭素×地域課題ワークショップ」の二つを実施した。ワークショップは、令和3年12月12日(土)、13日(日)に岩手県久慈市で行った。

## 3 結果と考察

### 3.1 岩手県内市町村アンケート調査結果

アンケート調査は、11市町村から回答があった(回答率33.3%)。結果は「地方公共団体における地球温暖化対策に関する法律施行状況調査報告書」で公表されている全国の状況と本調査結果とを比較する形で考察を行った。再生可能エネルギーの導入状況について、再生可能エネルギー導入に取り組んでいると回答した基礎自治体の割合は全国で73.9%であるのに対し岩手県では100%であった。また、森林吸収源対策に取り組んでいると回答した基礎自治体の割合は全国で20.6%であるのに対し、岩手県では36.4%であった。岩手県内市町村は、「地域の強み」を活かして脱炭素に向けた取組を行っている状況が明らかになった。

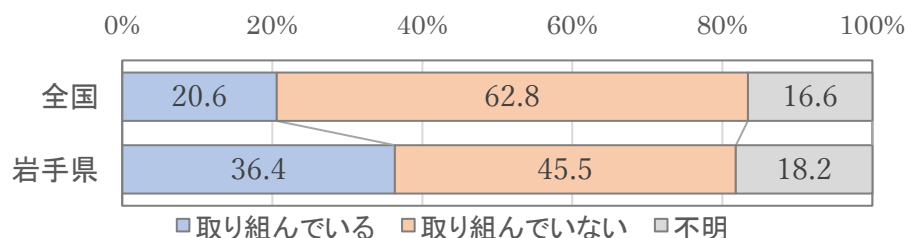


図2 森林吸収源対策への取組状況

### 3. 2 久慈地域でのワークショップ

脱炭素まちづくりアイデア・カフェでは、「脱炭素で元気な地域づくり」としてフードロスや資源循環の視点を組み込んだシェアリング農園や容器持込みによる食品の量り売りなどのアイデアが出された。「脱炭素×地域課題ワークショップ」では、仕事のミスマッチングなどの地域課題と、一次産業がさかんなど地域資源を組み合わせ、脱炭素に関連して取り組めるアイデアを出し合った。



### 4 今後の展望

脱炭素の主要なアクターは地域住民であり、普段から住民に寄り添って施策を展開する基礎自治体の果たす役割は大きく、今後も基礎自治体の課題に丁寧に寄り添った政策研究を行っていく。

※ 本研究は、筆者が参画した令和3年度岩手県立大学地域協働研究の成果の一部である。また、ワークショップにおけるファシリテーター徳田太郎氏の多大なる御協力に感謝する。